

2016年度科学技術インタープリター養成プログラム修了論文

臨床心理学における
量的研究と質的・理論的研究の連携

Collaboration among
Quantitative, Qualitative, and Theoretical Approach
in Clinical Psychology

2017年3月

東京大学大学院 総合文化研究科 広域科学専攻 修士課程
科学技術インタープリター養成プログラム 11期生

江川 伊織

指導教員 石原 孝二 准教授

要旨.....	3
1. 序論.....	122
2. 研究 1: 論文の引用関係の調査.....	124
2-1. 目的.....	124
2-2. 方法.....	124
2-2-1. 調査対象.....	124
2-2-2. 調査方法.....	124
2-3. 結果.....	124
2-3-1. 引用文献分類の結果.....	124
2-3-2. 量的研究の中での質的研究の引用.....	125
2-3-3. 質的研究の中での量的研究の引用.....	125
2-4. 考察.....	126
2-4-1. 結果のまとめと連携の実態についての考察.....	126
2-4-2. 限界点.....	127
3. 研究 2: 理論的研究と量的研究の連携に関するインタビュー調査.....	127
3-1. 目的.....	127
3-2. 方法.....	128
3-3. インタビュー内容.....	128
3-3-1. 浅井智久氏へのインタビュー.....	128
3-3-1-1. テーマ 1: 自他表象研究会を立ち上げたきっかけ.....	128
3-3-1-2. テーマ 2: 量的研究と理論的研究の連携の意義.....	129
3-3-1-3. テーマ 3: 自他表象研究会のような連携が少ない理由.....	130
3-3-1-4. テーマ 4: 連携を促進するために必要なこと.....	130
3-3-2. 田中彰吾氏へのインタビュー.....	131
3-3-2-1. テーマ 1: 量的研究と理論的研究の連携の意義.....	131
3-3-2-2. テーマ 2: 自他表象研究会のような連携が少ない理由.....	132
3-3-2-3. テーマ 3: 連携を促進するために必要なこと.....	133
3-4. 結果のまとめと考察.....	133
3-4-1. 量的研究と理論的研究の連携の意義.....	134
3-4-1-1. 理論的研究から量的研究への寄与.....	134
3-4-1-2. 量的研究から理論的研究への寄与.....	135
3-4-2. 連携が少ない理由.....	136
3-4-3. 連携を促進するための方策.....	136
3-4-4. 総括.....	137
4. 総合考察.....	138
5. 謝辞.....	140
6. 引用文献.....	141
7. 付録: 研究 1 の引用文献調査の詳細.....	143
8. インタープリター養成プログラムを受講して.....	145

要旨

うつや不安といった心の問題の理解と介入法の開発を目指す臨床心理学では、自然科学的な考え方にもとづいた量的研究だけでなく、インタビューで得られた語りなどを扱う質的研究や、必ずしもデータの収集を行わず、哲学的分析などを通して理論を構築する理論的研究も行われる。それぞれの研究方法の間には補完的な関係が指摘されており、相互の連携が期待されている一方で、それぞれの研究が独立に行われている様子もうかがえる。本研究では、国内の臨床心理学研究における量的研究と質的・理論的研究の間の連携の実態とその意義を検討することを目的とした。研究1では、論文間の引用関係を調べることで、量的研究と質的研究の連携について検討した。量的研究の論文が質的研究の中でも引用されていた一方で、量的研究の中の質的研究の引用は少数であった。研究2では、量的研究と理論的研究について、各研究法を専門とする研究者同士が1つのグループ内で連携する意義を調べることを目的とし、実際に連携の場を設けて活動している研究者へのインタビューを実施した。インタビューの結果、研究の方法や議論の前提を相互に問い直すことで、知見を洗練しあえるという連携の意義が指摘された。哲学的な視点を加えて実験デザインや実験結果の解釈を洗練させられるのは、研究者同士の直接の連携ならではの意義といえる。今後の研究では、本研究では検討しきれなかった研究者の連携に対する態度や、連携の促進・阻害要因についての検討を行い、必要な領域における効果的な連携の促進につなげることが期待される。

Abstract

In research on clinical psychology, researchers use not only quantitative, scientific approach but also qualitative approach (interview or participant observation) and theoretical, philosophical approach. It is expected collaboration among these approaches because of the complementary relationship. In this research, I examined the actual conditions and advantages of the collaboration. In study 1, I focused on the citation in the research papers to investigate the actual conditions of the collaboration in Japan. As the result, quantitative researches were cited by both of quantitative and qualitative researches. On the other hand, a small amount of qualitative researches were quoted in quantitative researches. In study 2, I interviewed two researchers, an experimental psychologist and a theoretical psychologist. They organize an interdisciplinary research group. In the interview, they stated that they could improve the validity of the experimental design and the interpretation about the experimental data by the direct discussion. In the future study, it is expected to investigate the attitude of researchers toward other methodologies for meaningful collaboration.

1. 序論

心の解明とその知見の応用には、脳神経科学などの自然科学的アプローチに加え、哲学や教育学などの人文・社会科学的アプローチも用いられる。科学技術にかかわる問題の中には、自然科学的な方法のみでは解決が難しく、人文・社会科学的なアプローチが求められるものがあるが、心を対象とした問題もそのひとつといえる。心を対象とした学問のひとつに心理学がある。Colman (2001) の定義では、心理学は「行動と心的経験の本質、機能、現象」を対象とした学問領域とされている。こうした対象を捉える方法として、心理学では実験や定量的な調査に代表される、客観的・数量的な自然科学的アプローチが主流となっている。

心理学には、扱う心の側面によって認知心理学、性格心理学、社会心理学などの下位区分が存在し、その本質や機能、現象の実証的な解明が進められている。心理学の中でも、抑うつや統合失調症、ストレスといった心の不適応とそれに対する介入を対象とする分野は、臨床心理学と呼ばれる。臨床心理学では、心の問題を抱えた人々に対して具体的な援助を行う実践性が重要な側面となるが、その実践性に学問的な裏づけを与える科学の側面も同様に重要となる(丹野, 2015)。ここにおける科学の側面とは、心の問題の成り立ちやその解決法を、他の実証的な心理学と同様の原理や方法にもとづいて解明する学問体系を目指す側面である。他の実証的な心理学の原理や方法にもとづくということは、定量化と客観性を基礎にすえた自然科学的アプローチが用いられるということである。実際に、抑うつや不安、幻覚といった心の問題のリスク要因や作動・持続メカニズムの理解のために、コンピュータ上に呈示された刺激への反応を抑うつ群と非抑うつ群で比較して抑うつと関連する認知機能を調べる実験が行われたり、治療効果の客観的な評価のために、特定の治療法による介入を行った群とそうでない群で症状の程度を定量的に比較したりする研究が行われている。このように、定量的なデータによって客観性の確保を目指す量的研究は、臨床心理学の科学性を成り立たせるうえで重要なアプローチとなっている。

その一方で、科学性と同様に、心の問題に対して具体的な援助を行う実践性も必要とされる臨床心理学においては、客観的な行動に関する記述を越えて、当事者の主観にどのような世界が立ち現われているかを理解することも重要となる(能智, 2011)。たとえば、統合失調症患者にとって幻覚や妄想が日常生活の中でどのような意味を持つのかといった、当事者にとっての意味や価値なども心の問題と密接に関連している。しかし、こうした主観的な領域は量的研究ではどうしても拾いきれない部分となってしまう。主観的に捉えられた意味や価値を数値化することは困難だからである。そのため、主観的な領域を理解するためには、面接によって得られた語りや記述といった質的なデータの分析も必要となってくる。このような質的研究も、臨床心理学の方法論として多く用いられる。量的研究が自然科学的な世界観を土台としているのに対し、質的研究は自然科学の客観的な世界観に立脚せず、主観的経験の意味を把握することを重視したアプローチと捉えられる。

また、心理学にはデータ収集を必ずしも伴わずに心的現象を説明する理論を構成するアプローチもある。過去の事例を統合して理論を提唱したり(佐々木, 2015)、現象学などの哲学的な視点から心の問題に関する概念や現象を分析したりする方法(Gallagher & Zahavi, 2008)が挙げられる。こうした研究は、実験や面接によるデータを取得すること

はないものの、抽象的な心の現象やメカニズムを説明する理論を生み出すことを通じて、心の問題についての理解と介入法の開発に寄与することができる。このように、いずれの段階でも観察（実験などの経験的手続き）を必要としないアプローチは理論的研究と呼ばれる（Kukla, 2005）。文献によっては、先行事例をまとめて理論を提唱する研究や、現象学的アプローチを用いた研究が質的研究に分類される場合もあるが（Langdridge, 2007; 佐々木, 2015 など）、データ収集を必ずしも伴わずに理論を構築するという観点から、本研究ではこうしたアプローチを理論的研究とする。

ここまで述べてきたように、臨床心理学研究では、自然科学的な考え方に立脚した量的研究のみならず、質的研究や理論的研究といった、自然科学的な考え方を必ずしもベースに置かない方法論も用いられる。以下に示すように、それぞれの方法論には得意とする機能があり、相互に補完的な関係があることが指摘されている。佐々木（2015）では、質的研究は仮説生成型の研究で、量的研究は仮説検証型の研究で多く用いられる傾向があることを指摘したうえで、質的研究や先行事例をまとめる理論的研究から仮説や理論が生成され、量的研究でそれが検証されるというサイクルを提示している。類似した指摘が下山（2002）や丹野（2001）でもなされており、心理学研究の主流である量的研究が、質的・理論的研究と連携することで、臨床心理学研究を進展させることが期待されていることがうかがえる。また、近年では量的研究と質的研究の両方のデータを同時に収集して分析する方法である混合研究法（Creswell & Clark, 2006）も提案されている。

しかし、連携が期待されている一方で、国内ではそれぞれの研究が独立に行われてきた様子が見え、記述も散見される。たとえば佐藤（2002）は、質的研究の成果が従来の評価軸では論文として認められないという事態が起きていた可能性を指摘し、そうした状況を打開する目的で、質的研究を用いた心理学論文を掲載するジャーナルとして『質的心理学研究』が発刊されたことを述べている。また、量的研究と質的・理論的研究の間の連携がどの程度行われているかを調査した研究は著者の調べた限りでは見当たらない。そのため、期待されている連携が実際にどの程度実現しており、どのような意義があるかを評価することが困難である。

そこで本研究では、国内の臨床心理学における量的研究について、質的・理論的研究との連携の実態と連携の意義を検討することを目的とした。この論点を考えるにあたり、連携が成立する層を2つに分けることとした。ひとつは、主に論文同士の引用関係によって成り立つ研究間の連携である。もうひとつは、異なる方法論を専門に持つ研究者同士が研究グループを組むことで成り立つ研究内の連携である。本研究ではこの2つの分類を踏まえ、2種類のアプローチを用いて検討を行った。研究1では、論文の引用関係から研究間の連携の実態を調査した。研究2では、専門とする研究法が異なる研究者同士の連携の場を設けて活動している研究者にインタビューを実施し、連携の意義を中心に調査した。研究1では量的研究と質的研究の連携に着目し、研究2では量的研究と理論的研究の連携について調べた。

2. 研究 1: 論文の引用関係の調査

2-1. 目的

研究 1 では、量的研究と質的研究の連携について、論文を介した研究間の連携の実態を調べることを目的とした。研究間の知見のやり取りを定量的に把握するために、論文の引用関係に着目した。研究論文の中で異なる方法論を用いた研究が多く引用されていれば、方法論を超えた知見のやり取りが活発に行われていると考えられる。異なる方法論の論文同士の引用数を連携の指標として扱うとともに、それらの論文の引用箇所や引用の文脈を調べることで、それぞれの方法論を用いた研究が他の方法論の研究の中で果たしている役割についても検討することを目指した。

2-2. 方法

2-2-1. 調査対象

一般社団法人日本心理臨床学会が発行している『心理臨床学研究』誌のうち、2016年に刊行された34巻(1号から5号)に収録された原著論文・研究論文を対象とした。『心理臨床学研究』は、(1)発行元である日本心理臨床学会が、国内の臨床心理学関連の学会では会員数が最多であること¹(2)量的研究と質的研究の両方が掲載されていること(3)収録されている研究論文が基づいている理論(精神分析理論、認知理論など)が特定のものに限定されていないことの3点を理由に調査対象として選んだ。原著・研究論文35件を研究方法に基づいて量的研究と質的研究に分類し、分類の難しかった6件(総説論文など)を除いた29件を調査対象とした。29件のうち、量的研究は10件、質的研究は19件であった。対象とした論文については付録に記載した。

2-2-2. 調査方法

調査対象とした論文の引用文献を調べ、研究方法と形式に基づいて量的研究、質的研究、混合研究、総説・理論的研究、書籍、その他の資料(ウェブサイトや雑誌の解説記事など)の6種類に分類した。序論では理論的研究を独立のものとして紹介したが、関連研究を総説したうえで理論的示唆を与えるという研究も多くあるため、総説論文と理論的研究論文を明確に区別することは困難であった。そのため、研究1の分類では合わせて扱った。

2-3. 結果

2-3-1. 引用文献分類の結果

調査対象とした量的研究・質的研究それぞれの引用文献の分類の結果を表1に記載した。量的研究の論文では、質的研究9件に対して量的研究が81件と多く引用されていた。一方、質的研究の論文では、量的研究18件に対して質的研究が39件と多く引用されていた。量的研究でも質的研究でも、同種の方法論を用いた研究がより多く引用されていた。混合研究や総説論文・理論的研究は量的研究と質的研究の間で大きな差は見られなかった。書

¹ 2016年6月30日現在の会員総数は28,330名・社(日本心理臨床心理学会ホームページ http://www.ajcp.info/?page_id=2 より)

籍については、量的研究での引用が 59 件だったのに対し、質的研究では 209 件と多く引用されていた。論文別の分類結果は付録に記載した。

表 1 量的・質的研究の論文中の引用文献の分類

	量的研究	質的研究	混合研究	総説・理論	書籍	その他	不明	合計
量的研究 (10 件)	81	9	3	23	59	23	20	218
質的研究 (19 件)	18	39	4	31	209	45	20	366
合計 (29 件)	99	48	7	54	268	68	40	584

※「その他」にはウェブサイトや雑誌の解説記事などが含まれる

※「不明」には学会発表や紀要など、文献の内容にアクセスできなかったものが含まれる

2-3-2. 量的研究の中での質的研究の引用

表 1 に示した結果では、量的研究の中では質的研究の引用が 9 件と少数であった。調査対象とした 10 件の量的研究のうち、質的研究を引用していたものは 4 件であった。引用本数の内訳は、4 件の質的研究を引用している量的研究が 1 件、3 件引用している研究が 1 件、残りの 2 件では 1 件ずつ引用されていた。

質的研究の引用箇所を見ると、量的研究と同様に、すべて序論と考察で引用されていた。また、引用の文脈を調べると、研究動向の紹介や仮説の根拠の提示、結果の解釈の補強などに用いられていた。引用の文脈については、量的研究の引用のされ方と比べて目立った違いは見られなかった。

質的研究が引用されていた 4 件の量的研究のうち、3 件の質的研究が引用されていた伊藤 (2016) では、流産による悲嘆反応が研究テーマであった。序文には、「悲嘆モデルは臨床実践から生まれたものであるため、それを実証した研究はまだ少ない」「流産の悲嘆については心理臨床領域での研究も少な」という記述があった。このことから、先行研究の蓄積が少ないテーマを扱った研究では、質的研究の知見が先行研究として用いられやすい可能性がある。しかし、質的研究を引用していた他の 3 件の研究では、当該テーマの研究の蓄積が少ないことを指摘する記述は見られなかった。なお、調査対象とした 4 件の研究には、研究テーマやデータ収集のフィールド、調査対象者、研究者の所属などに特筆すべき共通点は見られなかった。

2-3-3. 質的研究の中での量的研究の引用

量的研究の中での質的研究の引用は少数だったのに対し、質的研究の中では量的研究が比較的多く引用されていた。量的研究を引用していた論文は 19 件中 10 件であった。質的研究の中での量的研究の引用箇所を調べると、同種の研究である質的研究と同様に、序論や考察での引用が見られた。引用の文脈を見ると、序論では研究動向の紹介や理論の補強に量的研究が用いられていた。また、考察の中では、研究で得られた結果を先行研究である量的研究と比較したり、考察の補強として量的研究から得られた知見を引用したりする使われ方がほとんどであった。このような引用のされ方は、質的研究と同様のものではあ

た。質的研究の中では、量的研究だからといって特別な文脈で用いられているわけではなく、引用箇所や文脈については同種の方法論である質的研究と同様であった。

2-4. 考察

2-4-1. 結果のまとめと連携の実態についての考察

研究1では、量的研究と質的研究について、論文を介した研究間の連携の実態を調べることを目的とした。『心理臨床学研究』を対象とした引用関係の調査の結果、量的研究と質的研究のどちらでも同種の研究が多く引用されていた。それぞれ異なる研究法の引用数については、量的研究の中では質的研究の引用が少ない一方で、質的研究の中では量的研究が比較的多く引用されているという結果が得られた。

これらの結果から、量的研究は量的・質的研究のどちらでも引用されやすいことが見て取れる。この背景には、量的研究が知見の一般化を目指した研究方法であることが考えられる。量的研究では、普遍的な法則の理解を目指す自然科学的な考え方が土台にある（下山, 2002）。たとえば、ある認知的な特徴が抑うつの人に見られることを検証する目的で実験を行う場合には、個々の実験参加者の属性は統制し、研究対象である抑うつとその認知的特徴の間の関連だけを取り出して、その関連を抑うつの人に広く見られる特徴として示すことが目指される。そのため、研究成果が抑うつというトピックに関連する論文に広く適用できる可能性が高くなる。このような背景から、量的研究は量的・質的研究のどちらでも引用されやすいと考えられる。

一方、質的研究が量的研究のなかで引用される件数は少数であった。この背景には、質的研究は、扱うデータ（面接の語りやフィールドノート）の個別性が高いため（研究成果をデータが取得された文脈から切り離すのが難しいという事情があると考えられる。文脈を取り込んだり、特殊性を重視したりすることは質的研究の特色として挙げられるが（サトウ, 2004）、そのぶん研究成果を引用という形で用いることができる範囲はどうしても限定されると考えられる。引用数としては少数だが、量的研究10件のうち4件で質的研究が引用されていた。そのため、それら4件の研究にどのような共通点が見られるかを検討したが、確たる共通点は得られなかった。しかし、研究論文中の記述には、先行研究の蓄積が少ないテーマの研究で質的研究が引用されやすい可能性を示唆するものがあった。質的研究が仮説生成型の研究で用いられる傾向があるという佐々木（2015）などの指摘を踏まえると、質的研究には未開拓の研究テーマに先鞭をつけることで、仮説生成のきっかけを与える機能があることが考えられる。

研究1の結果を、本研究での検討事項である、論文を介した量的研究と質的研究の連携という観点から改めて整理したい。量的研究は質的研究の中で比較的多く引用されており、考察の補強などに寄与する情報がもたらされているといえる。一方、量的研究の中での質的研究の引用は少数であった。これらの引用関係からは、量的研究の研究成果が質的研究にある程度取り入れられており、研究成果のやり取りについて連携が見られるといえる。しかし、研究1の範囲では、この成果のやり取りは量的研究から質的研究への方向が主であり、双方向のやりとりがあるとはいえない。

2-4-2. 限界点

研究1では、国内の臨床心理学における量的研究と質的研究の連携について、以上のよう傾向が見られた。しかし、臨床心理学の研究を掲載する国内誌は『心理臨床学研究』以外にも複数存在する。本研究では、発行元の学会の会員数が最大であること、量的研究と質的研究の両方が収録されていること、特定の理論に限定した雑誌でないことなどを理由に『心理臨床学研究』誌を取り上げたが、他の雑誌に収録された論文でも同様の傾向が見られるかを確認する必要がある。

また、本研究では量的研究と質的研究の間の直接の引用関係のみを調査したが、どちらの研究法でも総説論文・理論的研究論文の引用が見られた。総説論文や理論的研究の論文は個別の研究の知見を集約していることから、量的研究と質的研究の知見のやりとりを媒介していることも考えられる。本研究ではその媒介関係を含めた分析は行っていないが、研究成果のやり取りの実態をより正確に捉えるには、今後はその点について検討する必要がある。書籍については、量的・質的研究を明確に区別できなかったことから考察の対象から除外したが、総説論文・理論的研究論文と同様に複数の研究分野の知見を集約する機能があると考えられる。

論文の引用関係を調べる方法の限界点として、異なる方法論の研究を著者が引用した意図などは検討することができないことが挙げられる。引用の文脈を調べた限りでは、異なる方法論の研究が特別な文脈で用いられている傾向は見られなかったが、研究方針や方法を検討したり、考察の展開を構想したりする段階などにおいて、方法論の異なる先行研究の知見がそれぞれ異なった影響を研究者に与えている可能性がある。佐々木(2015)などが指摘している質的研究の仮説生成機能を考えると、質的研究の知見が量的研究のテーマ設定のきっかけになるといったことがあり得る。しかし、論文中ではそうした影響は明示されにくい。研究間の連携の実態についてその内実をより深く理解するためには、論文の引用関係のみならず、研究者を対象とした調査を実施して引用の意図や連携に対する態度などを検討する必要があるだろう。

3. 研究2: 理論的研究と量的研究の連携に関するインタビュー調査

3-1. 目的

序論では研究法間の連携が成立する層を2つに分類し、研究1では論文を介した研究間の連携について検討した。研究2では、もうひとつの層である研究者同士がグループを組むことで成り立つ研究内の連携を取り上げ、ひとつのグループ内で異なる方法論の専門家同士が連携する意義を検討することを目的とした。この目的に向かうアプローチとして、実際に連携の場を設けて活動している研究者にインタビューを実施し、連携の意義や、連携における各研究法の役割を調べた。また、異なる方法論の専門家同士が直接連携する場が数少ないことから、連携が少ない理由と促進のために必要なことについても尋ねた。

研究1では、論文の内容をもとに理論的研究の論文を総説論文から明確に区別することが困難であったため、量的研究と質的研究の関係に限った調査・考察を行った。しかし、序論で述べたように、自然科学的アプローチに立脚した量的研究のみならず、哲学的な視点から理論を構築するような理論的研究も、臨床心理学研究を進展させるうえで重要な役

割を担っているといえる。そこで、研究 2 では量的研究と理論的研究の連携の場を設けて活動している研究者にインタビューを行った。

3-2. 方法

非公式の研究会である「自他表象研究会」のメンバー 2 名にインタビューを行った。自他表象研究会は、自己や他者を人間がどのように捉えているのかを広く研究テーマに据えた、2016 年 11 月設立の研究会であった。インタビュー対象として自他表象研究会を選出した理由は、以下の 2 点であった。ひとつは、自己意識との強い関連が指摘されている統合失調症などの精神疾患も研究テーマとして扱っており²、臨床心理学分野に関連した研究が行われている点であった。第二に、哲学や実験心理学、脳神経科学など、多様な背景の研究者がメンバーに含まれており、特に哲学を基盤とした理論的研究と、心理実験を中心とした量的研究それぞれを専門分野とする研究者が議論を交わしていることから、理論的研究と量的研究の連携がなされていると判断されたためであった。

研究 2 では、自他表象研究会のメンバーである浅井智久氏（NTT コミュニケーション科学基礎研究所リサーチアソシエイト）と、田中彰吾氏（東海大学現代教養センター教授）の 2 名にインタビューを実施した。浅井氏は実験心理学と異常心理学が専門であり、身体性と結びついた自己認知と統合失調症との関連を主な研究テーマとしている。田中氏は現象学的心理学や身体性哲学が専門であり、身体性との関連で自己意識や他者理解などの心の働きの理論化を主な研究テーマとしている。研究 2 では、それぞれ量的研究と理論的研究を専門とする浅井氏と田中氏に、両者が連携する意義を主なテーマとした非構造化インタビューを行った。インタビューの中では、専門の異なる研究者同士の連携の場が少ない理由や、連携を促進するために必要なことについても質問した。

2016 年 8 月 12 日に田中氏へのインタビューを、同年 10 月 18 日に浅井氏へのインタビューを実施した。インタビュー内容はインタビュー어의同意のうえ録音した。

3-3. インタビュー内容

以下には、両氏にインタビューで尋ねたテーマとそれに対する回答をそれぞれ抜粋し、まとめたものを記載した。

3-3-1. 浅井智久氏へのインタビュー

3-3-1-2. テーマ 1: 自他表象研究会を立ち上げたきっかけ

研究会は田中彰吾さんと立ち上げた。田中さんとはもともと研究の対象や興味が近かったもので、シンポジウムなどで会う機会があった。何度か会ううちに学会でシンポジウムを共催することになった。そのときに議論を交わす中で、気づいたことがけっこうあった。田中氏は哲学や現象学、いわゆる文系的なところをやっている人で、心理学という意味ではけっこう近いはずだが、今の心理学はどんどん理系化しようとしているため、意外と接点がない。いわゆる文系的なアプローチの心理学者との接点は意外となく、僕らがどんどん理系化しているということもあるので、あまりその辺の重要性を認識しなくなっている。

² 統合失調症と自己意識の関連については丹野（2002）などを参照

むしろ、心理学者の中では脳や情報系の研究者と仲良くしたがる人が増えてきている。僕もあまり何も考えていなかったが、田中さんとのいろいろな議論の中で、いわゆる文系の人と議論することの楽しさをまず気づかされた。例えば共同研究をしている人となら、実験の方法や結果の解釈、論文化の方法といった具体的な議論はするが、そもそもこのような研究テーマはどうなのだろうとか、どういう意味があるのだろうかとか、この概念は何なのだろうとか、そういう議論は意外としない。なぜかという、実際に共同研究をしているとそういう概念があるという前提からすべてが始まってしまうので、その根本を覆す話はなかなかしにくいからだ。田中さんとはもともと共同研究をしているわけでも実験をしているわけでもないで、データや数字を使わずに議論をしないといけない。そうすると、一段上から議論をせざるを得なくなる。普段僕らがしているような、実験内容やデータ、グラフなどを見ながらの議論が基本的にはできず、概念レベルの議論をたくさんすることになった。そして、そのレベルで議論をすることの大事さに気づいた。その学会でのシンポジウムが2015年の9月にあり、僕と田中さんが基本的に2人でやっていた議論を、もう少しだけ規模を数人程度に広げて継続的にできないかと思った。そこで、趣旨に沿った話ができそうな人たちに声をかけて、5人で集まって始めた。

3-3-1-2. テーマ 2: 量的研究と理論的研究の連携の意義

(1) まさに理論と実験という話になってくると思うが、連携というか共通の議論ができたことでひとつよかった点には、やはり研究対象が自己といったとても扱いにくいものだということが関連してくると思う。自己は結局漠然としているし、どうやって扱っていいかわからないものだから、そのまま実験では扱えない。だから何らかの形で理論的に整理が必要だし、そのうえで実験をせざるを得ないというのは実験側の人たちもわかっていることである。自分たちが実験をするときにもとにして自己の概念は本当にそれでいいのだろうかというのは、実験をしている人たちは常日頃から疑問に思っている。理論の研究者はその理論化を専門にしているので、概念についての議論を深められたのがよかった。

(2) お互いが必要としていた情報を相手が持っていたこともよかった。僕だと、自分の実験に哲学的な話が出てきたり、見聞きしたりはするが、本当はどういうことなのかよくわからないし、自分の理解が正しいかもわからない。そこを専門の人にちゃんと教えてもらえるととてもありがたい。そして、田中さんは理論が専門だが、実験のこともある程度は知っている。しかし、実験の結果などはおおまかに知っているかもしれないが、実験はけっこう細かいし、複雑なところもあるので、細かいところまでは当然知らないと思う。研究会の議論では、田中さんだったら哲学的な話や概念の話をするし、僕らだったら実験の紹介をする。お互いが必要としている情報をお互いが得られたことが意義として大きいと思う。

(3) 僕の回りはほとんど理系の研究者ばかりだが、データの扱いは非常に得意で上手いし、それは僕らが持っていないスキルである。しかし、一方で文系的というか、概念レベルの

議論は弱く、そもそも測ろうとしているものが何なのかといったことや、本当にその実験方法や結果の解釈は合っているのだろうかといった点は、やはり文系としての心理学者が貢献できる部分ではないかと思う。その上でやはり大事なはお互いに影響を与えあうことで、自分たちの弱い分野を認識して、勉強しなくてはならないと思えることが大事だと思う。

(4) 質問紙を使う調査研究だと、一番楽なのは既存の質問紙を使うことだと思う。それが悪いことではないが、やはり既存の質問紙を使いながらおかしいと思っている研究者も多い。何十年も前に作られているいろいろな問題も指摘されている質問紙でも使い続けられている。どこかのタイミングでそれはおかしいと一步踏み出せないと研究は進まない。質問紙にしても実験にしても、作り方が一緒だったらまた新しくできたものも同じ問題を抱えることになるので、いわゆる実験としての考え方は全部取っ払ってしまうくらいのこととしないと、結局今ある問題が解決しないとも思う。とても難しいことなので当然今はそこまではできていないが、僕らが理論的な哲学などの話から影響を受けることで、新しい実験パラダイムなどを考えられるということはあるのではないかと、ずっと思っている。

3-3-1-3. テーマ 3: 自他表象研究会のような連携が少ない理由

やはり自己保身だと思う。分野の違う人と出会うと、相手はある面では自分よりも優れた能力を持っているため、自分のできない面を意識させられる。分野の違う人とは必ずしも一緒にいなければならないわけではないから、多くの方は自分の苦手なことを意識させられるのを避けるために、異なる分野の研究者からは距離をとる。それが個人レベルだけでなく、研究の分野レベルでも起こっていると思う。心理学でも視覚などの基礎的なことを扱う学会と、より高次の認知などを扱う学会とが分かれている。自分の専門の学会の中にいる限り批判されることは少ないが、たとえば、より高次の心理現象を扱った研究を基礎的な学会に持っていくと、見ているレベルや技術が違うから、おそらく実験になっていないと厳しく批判される。反対に、基礎的な研究をより高次のことを扱っている学会に持っていくと、つまらないことをやっていると批判される。学際的なことが起こりにくいのは、そうした批判を受けずに済むならそのほうが良いという自己保身がおそらく関係していると思う。

3-3-1-4. テーマ 4: 連携を促進するために必要なこと

(1) ひとりの人間ができることが限られているのは事実だと思うが、個人の中に学際的な視点や技術を持つことを、最初から難しいと思っているとどうしても進まない。できないなりにどこまでできるのかを個人で探ることが少なくとも必要で、それに取り組む個人が増えることが分野同士の学際な連携につながるのではないかと思う。A の分野はできるが B は全くできないという人と、全く逆の人がいたとして、共通の言語を持っていないからその 2 人の話がかみ合うわけがない。A はすごくできるし B もまあまあできるという人がいて、逆のパターンの人がいてはじめて会話が成り立つし、学際的なところに行ける。だから、どちらもできるようにある程度やらなければいけないはずで、それを個人レベルで

目指すことが分野としての学際化にもつながると思う。

(2) 自分の分野の得意なことと苦手なことを把握したうえで、苦手なことを自分で克服したいと思っている人同士でないと学際的なコラボは絶対にできない。自分たちがやっていることだけでは足りないから相手の持っている知識がほしいというのがあって初めて連携が成り立つので、自分の分野の方法にいかにもいろいろな問題があるかを意識している人同士でないと連携はできない。その問題を知るためには、まずは個人の専門性を高めることと、分野の外にも触れる必要がある。

3-3-2. 田中彰吾氏へのインタビュー

3-3-2-1. テーマ 1: 量的研究と理論的研究の連携の意義

(1) 私自身は哲学的な理論よりのアプローチと、実験心理学でやるようなストイックな実験のアプローチが相互に刺激しあえるような関係が、本来の意味で生産的な研究ではないかと思っている。その点でお手本にしている学者がショーン・ギャラガーやダン・ザハヴィ³である。彼らは自分のことを哲学者だと認知しているが、ある概念について、実験心理学などの研究から上がっているデータに対して、哲学者のサイドからある概念を新しく提案するといったことを通じて、実験の側に新しく刺激を与えている。逆に、実験によって明らかにされたことが、伝統的な現象学のフレームに照らし合わせてみると、今までの議論になかったような新鮮な刺激を与えてくれるような場面もある。たとえば、主観性や間主観性の問題に、実験心理学や認知神経科学でやられていることが新鮮な刺激を与えてくれる場面もある。そう考えると、お互いに啓発しあえるような部分があるように見える。私にとってはそれが自分の中でどこかお手本になっている。実際に浅井さんと一緒に議論しているのも常々そういう話で、私自身は実験を組むというのはなかなか難しくできないが、実験でやられていることが哲学サイドから見ればこういう整理が可能かもしれないと、常に実験の話聞いたうえでボールをこっち側から投げ返していくということをやっている。それによって実験の意味が明らかになったり、今までの実験ではそうした着眼がなかったのでこういう実験を考えてみようかという話になったりする。逆に、例えば自己や主観性の問題に関して、浅井さんらがやっているような研究は刺激に満ちている。この分野で重要な概念や現象の意味を巡って実験から何を言えるのかということについて結構突っ込んだ議論ができる。そうすると今度は実験のほうが哲学に対してあるインスピレーションを与えるという関係になっている。そこでお互いに啓発できるような関係を築ければ私はこれが一番心の研究をダイナミックに、豊かにするのではないかと考えている。

(2) 問いや概念を設定すること自体は実験をやっている研究者もできる。だから、必ずしも問いを立てるのが哲学サイドで、実験をするのが経験科学者サイドであるというすみわけ関係はきれいではないと思う。実験をやる研究者は、何が変数なのかを実験の専門家と

³ Shaun Gallagher, Dan Zahavi. 両者ともに哲学を専門とする研究者であり、共著書に Gallagher & Zahavi (2008) *The phenomenological mind: Introduction to philosophy of mind and cognitive science* (邦訳タイトル: 現象学的な心) がある。

しての直感で大まかに先につかんでおいて、現場の実験を組み立てていくということがあると思う。これについて理論をやっているサイドから見ていて何かが言えるとすると、本当にその変数の目の付け所でいいのか、その変数に目を付けたきっかけは何かというところを議論していくと、もう少し議論を洗練できるというか、最初の問いの立て方を概念的に詰めてアプローチできるのではないかと思う。また、実験結果が、哲学の中で伝統的に問われてきたことに対して、その問の立て方で本当に良かったのかと問い直すきっかけになるという逆のフィードバックもあり、必ずしも一方的ではない。

(3) ある実験パラダイムが確立されている場合は、先行研究のパラダイムに乗っかっていくほうが成果を出しやすい。現場で実験をやっている人にとってはあまり大それたことをやらないほうが、当面の成果は手堅くあげることができる。ただ、それで本当に何がわかるのか、実験をやっている人が疑いをもって考え直すタイミングが来たときには、おそらく先行研究を離れてコンセプチュアルな議論をもう一回やり直さないといけなくなる。その点は実際に実験をやっている人が事態をどう見ているのかによっても、コラボできたりできなかつたりすることがあると思う。安定した実験パラダイムが機能している場合には、哲学者と議論をやるだけ混乱して無駄だということもあり得ると思う。ただ、自分のやっていることを批判的に見るとか、自分のやっている実験にどんな意味があるのかをきちんとレビューする目で整理して考えたいという希望がある人にとっては、コンセプチュアルな議論を哲学畑の人とやることにはとても意味があると思う。

3-3-2-2. テーマ 2: 自他表象研究会のような連携が少ない理由

哲学的・概念的な議論を突き詰めた結果、とても斬新な実験を組んでしまった場合には、その斬新さをポジティブに評価するレビュアーがちゃんと見つかるかどうか結構難しいということがあると思う。実際にはある手続きにのっとった先行研究がスタンダードになっている実験だと、その実験を根本から組み替えて新しいやり方で検討するような論文を仮に投稿したとしても、レビュアーを探す段階ですごく時間がかかってしまったり、レビューを引き受けてくれる人が実際にいなかったりといったことがあると思う。また、保守的なジャーナルの場合だと、あまりに斬新過ぎるというだけでリジェクトになってしまうといったことが、実際の科学的な研究の現場ではあると思う。この点は、科学的な研究の制度自体が新しい研究のスタイルを阻んでいるといえなくもないと思う。現状の科学論文の書き方の制度設計そのものが有効なコラボレーションを阻んでいる面もあるように思う。それは人文系の分野についても全く同じで、既存の実験研究に関してこのような新しい概念の組み換えができて、新しい実験が考えられるので、やってみたと論文で仮に書いたとしても、哲学系のジャーナルでは載らないタイプの論文になってしまう。人文系は人文系で同じ事情が働いているのかもしれない。実際には制度設計上具体的に論文を出せる場所が少ないというのも、分野が連携した研究が出てきにくくなる要因のひとつではあると思う。世界的に見るとそのような場所がないわけではないが、大きな潮流になっているかというところまで進んでいるわけではない。

3-3-2-3. テーマ 3: 連携を促進するために必要なこと

(1) その分野で当たり前に使われているジャーゴンを、こちらにもわかるという前提で話されてしまうと話が通じないので、その分野で当たり前に使われているテクニカルタームをその分野の外にいる人に説明するとき、正確にかつ分かりやすく説明できるかどうか重要である。自分の分野を客観的に見つめられる研究者はそれがうまくできることが多いと思う。心理学の中では他の科学とは違う性格があるかもしれない、日常生活で使う用語がその分野のテクニカルタームになっている。たとえば、「不安」などはある場面では操作的な定義がなされた概念として使われているかもしれないが、ほかの分野の人から見ればその共通理解が全くない可能性がある。日常生活の用語で語っているがその分野で特定された意味がはっきりあるというケースがあり、それは自然科学側から人文科学を見るときの一いつの壁になりやすい要因かもしれない。逆に自然科学を外から見ると、自然科学の世界のテクニカルタームが日常生活の実感とどうつながっているのか全くわからないという可能性もある。そのあたりの言葉の意味範囲に対する感受性が鈍い人は学際的な対話には向かない気がする。つまり、学際的な研究が可能になるためには、自分の専門分野の言葉を別の文脈で語りなおすということが必ず必要になると思う。自分の分野が他の分野から見たときにどういう文脈に立っているのかを、異分野の目で相対化して語るができないと対話にならないと思う。そういう意味では自分が普段当たり前に使っている言葉を脱文脈化して、別の文脈に置き換えて語りなおせるかどうかはとても重要な条件だと思う。

(2) 自分の分野がすべてだと思っている人ばかりだと連携はあり得ないので、異分野の知見に対して虚心坦懐に聞く耳を持てるかどうか基本的なところとして大きいと思う。ただし、ある分野の専門家になろうとすると、どうしても分野ごとの伝統的なアプローチと、そこから見えてくる研究の成果が正しいことをある程度信じていかないと、ひとつのディシプリンは極めていけないと思う。そうすると、あるディシプリンの分野で専門家になるときに別のディシプリンを捨てるということも必要になってくると思う。しかし、とりあえず自分は専門家としてこれを選ぶのだけれども、選ばなかったほかのアプローチにも見るべきものがあることに目が開かれているというのは、研究者の養成の段階で大事だと思う。自分の分野がすべてだと思えばいけない部分と、すべてではないと相対化するバランスを養成することが重要となる。

3-4. 結果のまとめと考察

研究 2 では、量的研究と理論的研究について、各研究法を専門とする研究者同士が、1つのグループ内で連携する意義の検討を目的とし、実際に連携の場を設けて活動している研究者へのインタビューを実施した。以下では、インタビューにおける主要なトピックとして尋ねた連携の意義と、連携がうまくいかない理由、連携を促進するために必要なことの3点についてそれぞれ考察する。

3.4.1. 量的研究と理論的研究の連携の意義

このテーマについては、浅井氏のインタビュー中のテーマ 2、田中氏のインタビュー中のテーマ 1 で主に取り上げられている。浅井氏が量的研究の中でも特に実験研究を専門分野としていたことと、自他表象研究会で主に取り上げられていた研究手法が実験研究であったことから、量的研究の中でも実験研究を念頭に置いた回答が得られた。また、田中氏の専門分野が現象学的心理学であったことから、哲学的なアプローチによる理論的研究と実験研究の連携の意義が語られた。はじめに、連携による各研究法からもう一方への寄与についてまとめたい。

3-4-1-1. 理論的研究から量的研究への寄与

まず、理論的研究から実験研究への貢献としては、「自己」のように抽象的なものを研究対象として扱う場合に、理論的な整理が可能となることが挙げられた。心理学の実験研究には、研究テーマ・仮説の設定→実験の設計・実施→結果の解釈という一連の流れが存在する。抽象的な研究対象を理論的に整理する意義について、インタビューで得られた内容を上記の流れの工程別にまとめると、以下のように整理できる。

研究テーマと仮説の設定における意義としては、哲学的・理論的視点を踏まえた議論をすることで、最初の問いの立て方を概念的に詰めることが可能となることが挙げられる(田中氏のテーマ 1(2))。実験の設計・実施の工程については、理論的な整理ができることで、実験心理学の視点からだけでは得られなかった着眼点が見え、先行研究の実験デザインを問い直すことで、抽象的な研究対象を測定するためのより妥当な実験につながることを挙げられる(田中氏のテーマ 1(1), (3))。結果の解釈の段階では、実験によって得られた数値から、抽象的な研究対象について何が言えるのか、結果の解釈の妥当性を洗練させることにつながるという意義が挙げられる(浅井氏のテーマ 2(3))。

臨床心理学に関する先行文献では、理論と量的研究の関連として、過去の事例を統合して得られた理論を量的研究が検証するという流れが主に指摘されている(佐々木, 2015; 下山, 2002 など)。この流れの中では、個々の事例を扱った質的研究の知見を理論という形に統合し、量的研究の側に理論や仮説を提供することが理論的研究の機能であると考えられる。しかし、本研究のインタビューでは、理論的研究は量的研究の研究テーマや仮説の設定の段階のみならず、研究手法の設計や結果の解釈の段階にも貢献し得ることが示された。量的研究のためのリサーチクエスチョンや仮説を得るのは、理論的研究の論文を参照するだけでも可能であると考えられる。しかし、理論的背景を十分に反映させた研究手法の設計や結果の解釈を行うには、理論構築のもととなる事例や哲学的な背景に詳しい専門家との直接の議論が必要となるだろう。論文上での知見のやり取りだけを見るのであれば、理論的研究から量的研究への寄与は理論・仮説の提供が中心となるが、研究者同士の直接の連携にはそれに加えて、研究手法と結果の解釈の洗練が実現するという意義があるといえる。

自他表象研究会で扱われる対象に限らず、臨床心理学の研究対象は抑うつや不安、妄想といった抽象的で直接測定することが不可能なものである。実験研究ではそれらを刺激に対する反応時間や記憶課題の成績などのデータから間接的に把握することになる。このよ

うに対象の把握が間接的にならざるを得ない心理学の研究では、自身の研究手法が対象を調べるうえで妥当であるかを吟味することが重要となる（高野, 2004）。しかし、関連した先行研究の実験手法を無批判的に採用してしまう研究者も多いのではないと思われる。これは、浅井氏のインタビューのテーマ 2 (4) や田中氏へのインタビューのテーマ 1 (3) でも触れられていた。この背景には、いったん査読を経た先行研究で使用されていた研究手法をそのまま採用することで、オリジナルの実験を新たに組み立てるよりも研究を効率的に進められるという事情もあるだろう。同様の手法を用いた研究が繰り返し行われることには、科学研究における重要な要素である再現性の検証がなされるという利点もある。しかし、先行研究の手続きの踏襲を重視するあまり、研究者の狙いから外れた測定をしてしまう手法を採用してしまつては本末転倒になる。本研究のインタビューからは、理論的側面に詳しい専門家と実験研究の専門家が直接連携して議論を交わすことには、研究対象と研究手法の間の対応関係の吟味を精緻に行えるという意義があることがうかがえた。

上記の意義は、量的研究のうち実験研究についてのみならず、質問票を用いた調査研究についてもいえると考えられる。調査研究では、関心のある心的現象（感情や性格特性・精神疾患の症状など）を、自己記入式の質問票への回答をもとに定量的に測る。質問票は研究の目的に合わせて研究者が新たに作成したものを使用することもあれば、先行研究で使用されたものを用いる場合もある。BDI (Beck's Depression Inventory) と呼ばれる抑うつ度を評価する質問票は、臨床的な観察と患者の訴えにもとづいて作成されている (Beck et al., 1961)。このような質問票を用いた調査研究を実施するときに、理論構築のもととなる臨床事例や哲学的な背景に詳しい専門家との議論により、個々の質問項目が研究で関心のある概念と対応していることを吟味したり、研究結果の解釈の妥当性を高めたりすることが可能となると考えられる。

3-4-1-2. 量的研究から理論的研究への寄与

反対に、量的研究から理論的研究への寄与としては、田中氏のインタビューのテーマ 1 (1) (2) で指摘されたように、実験結果を理論的研究の伝統的な説と比較することで、新たな切り口で理論を考えることにつながったり、理論的研究や哲学の問の立て方を問い直したりするきっかけになることが挙げられる。

田中氏はインタビューの中で、実験研究から哲学に新しい視点がもたらされた具体例として、ラバーハンド錯覚を挙げていた。ラバーハンド錯覚とは、ダミーの手が自分の手と同時に触られているのを見ていると、ダミーの手だけが刺激されたときにも自分の手が刺激されたような感覚が生じる現象のことであり、実験心理学でしばしば用いられる (Tsakiris & Haggard, 2005 など)。伝統的な哲学では、道具として使いこなしているものが身体の延長になることは議論されていたが、静止物にまで身体性が延長できるという議論はなかった。しかし、ラバーハンド錯覚の実験結果は、身体に接触しておらず、動きがないものに対しても身体性が転移することを示すものであり、身体性の哲学に新たな視点をもたらすものであった。

先行文献では、理論的研究から提案された仮説や理論に対して、量的研究が科学的な検証を与えるという関係が指摘されている (佐々木, 2015; 下山, 2002 など)。本研究のイン

インタビューでは、従来の理論とは反していたり、これまで言及されていなかった現象が実験により見出されたりした場合に、理論的研究における問いの立て方を再考する契機がもたらされることが指摘された。このことから、実験研究には理論的研究に対する検証の機能のみならず、理論的研究でなされていた議論に対して新たな視点を提起する機能があるといえる。

3-4-2. 連携が少ない理由

インタビューでは、自他表象研究会のような連携が少ない理由についても尋ねた。これについては、浅井氏のインタビューのテーマ 3、田中氏のインタビューのテーマ 2 で主に取り上げられた。

浅井氏からは、批判を避けたいという研究者の自己保身が理由として挙げられた。分野を異にする研究者との連携には先述した意義がある一方で、自身の分野の中では見過ごされていた批判にさらされたり、研究者としての至らなさを実感したりするといった痛みも伴う。そのため、その痛みを回避するように、他分野の研究者との接触を避ける傾向があるのではないかという指摘が得られた。

一方、田中氏からは、連携の結果生まれた斬新な研究が掲載される雑誌が少ないという制度面での課題が指摘された。この背景として、斬新な研究を適切に評価できる査読者が少ないことや、ひとつのジャーナルの中で受け入れられやすい方法論が定式化すると、そこから逸脱した手法を採用した研究が採用されにくいことが挙げられた。国内の心理学研究の動向についても、質的研究の評価をめぐる議論の中で類似した問題点が指摘されている。佐藤（2002）では、質的研究の成果が従来の評価軸では論文として認められないという事態が起きていた可能性を指摘している。理論的研究と量的研究の連携研究についても、評価軸の不在により成果が認められにくく、連携が敬遠される傾向があると考えられる。

3-4-3. 連携を促進するための方策

浅井氏のインタビューのテーマ 4、田中氏のインタビューのテーマ 3 では、分野を超えた研究者同士の連携を促進するためには何が必要かを尋ねた。

浅井氏の回答では、研究者個人が自身の専門性を高めるなかで、自身の方法論が持つ課題や限界を把握し、まずは自分で他分野の知識を習得してその課題を克服しようとする必要があるという回答が得られた。自分分野の専門性を高めて問題点を把握することで、他分野の知見を求める必要が生じる。ただし、相手の分野について全く知らない研究者同士では意思疎通が図れないことに注意する必要がある。最初から他分野の研究者の力を借りるというスタンスではなく、まずは独力でその必要を満たすべく手を尽くし、自身の専門分野についてはもちろん、相手の分野についてもある程度わかるようになることが、連携のための意思疎通の基盤を形成することになる。以上が浅井氏の回答の主旨であった。研究者個人の学際性を高めることが全体での学際性を高めることになるという指摘には、田中氏の回答とも共通点がある。田中氏は、個人の研究者が、自身の専門とする方法論に信頼を置きながらも、同時に他の方法論の有用性にも目を向ける、専門化と相対化のバランスが重要であることを述べていた。

両氏の回答を総合すると、以下のようなプロセスが有意義な連携を実現する上で重要となるといえよう。自身の分野の専門性を高めることが、その分野の方法論に内在する問題を把握することにつながり、その問題を解決するために他分野の見識を必要とするようになる。そのような過程を経た複数の研究者が、相互に相手の分野の見識を必要としたときに、相互に情報のやり取りがなされる有意義な連携が成立すると考えられる。

また、田中氏からは専門用語の扱いについての指摘が得られた。専門化と相対化のバランスで言うと相対化のほうに属するポイントであるが、自分分野の専門用語が相手の文脈でどのように理解されているかを踏まえたうえで、自身が当たり前に使っている自分分野の文脈から別の文脈に語りなおすことが重要であるとの指摘であった。特に臨床心理学では、「不安」や「パニック」といった、日常的に用いられる語が特定の定義を持つ専門用語として扱われることが多い。そのため、日常語としての意味に捉えた人と特定の意味を持つ専門用語として捉えた人との議論では、知らず知らずのうちに理解にずれが生じる恐れがある。理論的研究と量的研究など、方法論を超えた連携の際にも、そうした理解のずれが生じる危険性がある。廣野 (2008) は、科学者が発信する情報は自文化内での暗黙の前提を多く共有する高コンテクスト的なものであるため、誤解の生じにくいコミュニケーションを成立させるためには、暗黙の前提を意識化・言語化する必要があることを指摘している。この指摘と田中氏の見解の趣旨は共通している。異なる方法論の専門家同士の連携においても、自分分野で用いられている用語が背景に暗黙の前提を多く含んでいることに自覚的である必要がある。臨床心理学における方法論を超えた連携の際には、分析に伴う統計学用語など、他分野の研究者にとって理解が難しい用語のみならず、たとえば「自己」といった、日常的に用いられるだけに意味の捉え方に幅がある概念についても、研究者間の共通理解をもつように注意を払うことが必要となるだろう。

3-4-4. 総括

研究 2 では、量的研究と理論的研究それぞれを専門とした研究者同士の直接の連携の意義を、インタビュー調査により検討した。その結果、量的研究を進める過程の各段階（研究テーマと仮説の設定・実験の設計と実施・結果の解釈）について概念的な議論を深めたり、実験結果から理論的研究に新たな視点が開けたりするという意義が語られた。量的研究を進める過程で概念的な議論を深められる点は、研究者同士の直接の連携ならではの意義といえる。

ただし、専門領域の異なる研究者同士が連携して研究を行うにあたり、研究者の自己保身的な態度や、連携の結果生まれた斬新な研究が評価される場が十分に整備されていないといった制度上の問題がブレーキとなることも指摘された。自他表象研究会で行われているような連携がそこまで多くはない背景には、そうした要因が関係していると考えられる。当面は浅井氏と田中氏が自他表象研究会を立ち上げたような動機から生まれる私的な連携が散発的に起こるだけであっても、連携の意義が広く認知されることで、相互に有意義な議論ができる連携が次第に広まることが期待される。連携を円滑に進める際には、3-4-3. にまとめた、完全な分業をするのではなく相手の専門分野を理解することにも手を尽くすことや、自分分野と他分野の用語の捉え方の違いに注意を払うといった工夫が有効になるだ

ろう。

また、有意義な連携のためには、研究者が他分野に関心を持つことはもちろん重要となるが、自身の分野の専門性を高めることが連携の土台としてより重要であるといえる。自身が専門とする方法論の不十分な点を自覚し、そこを補いたいと求めることが連携の出発点となる。また、実際に連携を行う中でも、専門性が不十分な研究者同士の連携からは有意義な議論が生まれにくいということは、浅井・田中両氏が強調していた点である。研究者養成の段階でも、連携を見込むあまり広く浅い知識に留まることになっては本末転倒で、確たる専門性を身に着けることは最優先事項であるといえる。

研究2のインタビューは一事例のみのものであったため、連携の意義などについて得られた知見が適用可能な範囲については限界がある。調査研究や、事例を統合する種類の理論的研究では、本研究のインタビューから得られた内容とは異なる事情が生じることが予想される。しかし、3-4-1-1.で調査研究においても理論的研究との連携の意義が指摘できたように、他の事例への応用可能性は少なからずあると考えられる。今後の研究では、他の連携事例や混合研究を実施している研究者を対象とした調査を行うことで、本研究の事例との差異や、共通した知見について検討していくことが期待される。

4. 総合考察

本研究では、国内の臨床心理学における量的研究と質的・理論的研究の間の連携の実態とその意義を検討することを目的とした。連携の形式として、論文などを媒体とした研究間の連携と、研究グループ内での研究者同士の直接の連携という2つの層を想定した。前者の実態と意義を検討するために論文の引用関係を調査し、後者については、実際に研究者同士の連携の場を設けて活動している研究グループにインタビューを実施した。文献調査では、量的研究の知見は質的研究の中にある程度取り入れられている一方で、量的研究が質的研究を参照することは少ないことを示す結果が得られた。インタビュー調査では、量的研究と理論的研究それぞれを専門とする研究者同士の直接の連携には、研究の前提や研究手法を相互に問い直し、洗練させることができるという意義があることがうかがえた。

研究1と2を総合すると、研究間の連携について以下のことが示唆される。量的研究は、研究1の結果より、質的研究をはじめとする異なる研究方法にも知見を広く提供できる特徴をもつと考えられる。また、研究2では、量的研究が仮説や理論の実証のみならず、他の研究方法で前提となっている議論を数値による結果を示すことで問い直す働きがあることが指摘された。この指摘は、田中氏が、ラバーハンド錯覚が身体性の哲学に新たな議論をもたらしたことを例に挙げていたことから、研究内の連携のみならず、研究間の連携についても適用できると考えられる。研究2では、理論的研究が量的研究のテーマ設定や研究手法の洗練に寄与することも指摘された。理論的研究では、個々の事例の統合が行われたり(佐々木, 2015)、哲学的な視点から理論を考察していく際にも個別事例の分析がなされたりする(Langdrige, 2007)。そのため、質的研究からの知見が取り入れられていると考えられる。研究1では質的研究から量的研究への知見の流れは少数であったが、理論的研究の性質を考慮に入れると、質的研究の知見は理論的研究を介して量的研究に届いていることが考えられる。以上をまとめると、国内の臨床心理学における量的研究・理論的研究・質

的研究の研究間の知見のやり取りについて、図1のようなモデルが考えられる。下山(2002)などでも研究法間の連携を示したモデルが提案されているが、図1のモデルでは、理論的研究を独立のものとして考えたことと、量的研究と質的研究の間の直接の知見のやり取りについて、論文間の引用関係の定量的な調査の結果を反映させていることが特徴である。

ただし、図1のモデルには以下のような課題がある。まず、研究1の課題でも触れたが、理論的研究と量的研究・質的研究それぞれの間の引用数の調査が困難であったため、灰色と白抜きで示された関係は、研究2のインタビューと先行文献の指摘のみに基づいている。また、黒の矢印で示した研究1の調査も、対象とした雑誌が限定されていた。そのため、図1に示したモデルは今後の追加調査により妥当性の検討が待たれる仮説モデルであるといえる。

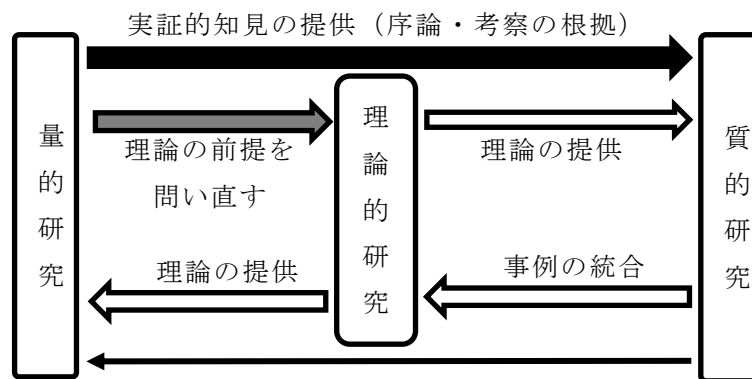


図1 本研究から示唆される、臨床心理学の研究法間の知見のやり取りのモデル

- ※ 研究グループ内の連携ではなく、論文などを介した研究間の連携を表す
- ※ ◀ は研究1、◀◀ は研究2、◀◀◀ は先行文献にそれぞれ拠っている
- ※ 黒い矢印の太さには、研究1の結果に見られた引用数を反映している

また、研究者同士の直接の連携には、研究間の連携では得られない意義があることがインタビューで指摘された。有意義な連携のためには、研究者が他分野の知見に目が開かれていることが必要になるが、その土台として、自分分野の専門性を高めることが不可欠であることを浅井・田中両氏が強調していた。これは、研究間／研究内の区別にかかわらず、異なる分野や方法論同士の連携について広く適用できる重要な示唆である。量的研究・質的研究・理論的研究には、それぞれの方法論でしか検討できない領域があるからこそ方法論として区別されている。連携の名のもとに無暗に方法論を融合させると、それぞれの分野でしか明らかにできないものは何か曖昧になり、他の分野に何を求めているかが相互に不明瞭になってしまう恐れがある。そうした状態に陥っては、連携の意義は見いだせな

くなるだろう。研究者の専門性を高めることは、こうした事態に陥ることなく有意義な連携を実現するために欠かせないものであるといえる。

研究者同士の連携にはインタビューで指摘されたような意義が認められるが、本研究はあらゆる分野での連携の必要性を主張するものではない。浅井氏がインタビューの中で、自他表象研究会では「自己」という扱いにくい研究対象を取り上げて議論できたことに意義があったと述べていたが(3-3-1-2.(1))、自他表象研究会は自己や身体性といった、実験を用いた量的研究の方面からも、哲学的な理論研究の方面からもタッチできるテーマを設定していたからこそ連携の意義があったと考えられる。各方法論にそれぞれの特色がある以上、他の方法論では踏み込めない部分が必要であり、そうした部分に関しては各方法論が独立に研究を進めるほうが適切であると考えられる。そこで無理に連携を進めようとするれば、先述したようにほかの分野に何を求めるべきかが不明瞭な、意義に乏しい状態となるだろう。そのため、連携があらゆる領域で必要とされるわけではないと考えられる。あわせて、本研究は各方法論が独立に研究を進めている状態を批判し、統合された方法論の必要性を主張するものでもない。各方法論の独立性と専門性を押さえたうえで、現在の臨床心理学分野の研究をさらに進展させるためのひとつの方略として方法論間の連携を位置づけ、調査の結果から連携の意義を示したものである。

最後に、本研究全体の課題と今後の展望について述べたい。研究1の文献調査では、論文の引用関係のみの調査であったため、研究者が実際にどのような連携を行っているかは明らかにできず、研究者が異なる方法論同士の連携についてどのように捉えているかといった検討は行うことができなかった。また、インタビューも一事例のみであったため、他の研究テーマでどのような連携がどの程度行われているかまでは検討できていない。今後は、臨床心理学に携わる研究者を対象に規模を広げた調査を実施し、連携の実態や研究者の捉え方、連携の促進・阻害要因などを調べることで、連携が必要な領域における効果的な連携の促進につなげられることが期待される。

5. 謝辞

本論文の執筆にあたり、たいへん多くの方のご助力を賜りました。第一に、研究指導をお引き受けいただき、丁寧なご指導を下さった石原孝二先生に御礼申し上げます。先生のご指導なくして、本研究をこのように形にすることはできませんでした。本当にお世話になりました。また、突然のお願いにもかかわらずインタビューへのご協力をご快諾くださり、貴重なお話を下さった浅井智久さんと田中彰吾先生にも御礼申し上げます。お話の内容は本論文に限らず、今後の進路においてもたいへん参考になるものでした。さらに、研究に貴重なご助言を下さり、日々の講義などの中でも叱咤激励と温かいご支援を下さったインタープリタープログラムの先生方・先輩方・12期のみなさまにも感謝いたします。そして、常に向上し続ける姿勢を示し続けることで私の油断を決して許さず、それでいて居心地のよい仲間であり続けてくれた11期生のみなさまにも感謝します。最後に、副専攻のテーマにもかかわらずご相談に乗ってくださった本専攻の研究室の先生に、本専攻の修士論文のご指導への感謝も合わせて御礼申し上げます。

6. 引用文献

- Beck, A. T., Ward, C. H., Mendelson, M., Mock, J., & Erbaugh, J. (1961). An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychiatry*, 4, 561-571.
- Colman, A. M. (2001). *Dictionary of Psychology*. Oxford University Press. (藤永 保・仲真紀子 (監修) 岡ノ谷 一夫・黒沢 香・泰羅 雅登・田中 みどり・中釜 洋子・服部 環・日比野 治雄・宮下 一博 (編) 心理学辞典 普及版 丸善株式会社)
- Creswell, J. W., & Plano Clark, V. L. (2006). *Designing and conducting mixed methods research*. Sage. (大谷 順子 (訳) (2010). 人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン 北大路書房)
- Gallagher, S., & Zahavi, D. (2008). *The phenomenological mind: An introduction to philosophy of mind and cognitive science*. Routledge. (石原 孝二・宮原 克典・池田 喬・朴 嵩哲 (訳) 現象学的な心 勁草書房)
- 廣野 喜幸 (2008). 科学コミュニケーション 藤垣 裕子・廣野 喜幸 (編) 科学コミュニケーション論 (pp. 65-91) 東京大学出版会
- 一般社団法人 日本心理臨床学会 日本心理臨床学会とは Retrieved from http://www.ajcp.info/?page_id=2 (2017年2月27日アクセス)
- 伊藤 美奈子 (2016). 流産による悲嘆反応とそれをめぐる関連要因 心理臨床学研究, 34(1), 4-14.
- Kukla, A. (2001). *Methods of theoretical psychology*. MIT Press. (羽生 義正 (訳) 理論心理学の方法—論理・哲学的アプローチ 北大路書房)
- Langdrige, D. (2007). *Phenomenological psychology: Theory, Research and Method*. Pearson Education. (田中 彰吾・渡辺 恒夫・植田 嘉好子 (訳) 新曜社)
- 能智 正博 (2011). 質的研究法 東京大学出版会
- 佐々木 淳 (2015). 臨床心理学研究法 丹野 義彦・石垣 琢磨・毛利 伊吹・佐々木 淳・杉山 明子 臨床心理学 (pp. 335-357) 有斐閣
- 佐藤 達哉 (2002). モード II・現場心理学・質的研究：心理学にとっての起爆力 下山 晴彦・子安 増生 (編) 心理学の新しいかたち 方法への意識 誠信書房
- サトウ タツヤ (2004). 質的研究はどうして出てきたか 一回性、特殊性、歴史性への志向 無藤 隆・やまだ ようこ・南 博文・麻生 武・サトウ タツヤ (編) ワードマップ 質的心理学 創造的に活用するコツ 新曜社
- 下山 晴彦 (2002). 心理学の新しいかたちを探る 下山 晴彦・子安 増生 (編) 心理学の新しいかたち 方法への意識 誠信書房
- 高野 陽太郎 (2004). 科学と実証 高野 陽太郎・岡 隆 (編) 心理学研究法 心を見つめる科学のまなざし (pp. 2-19) 有斐閣
- 丹野 義彦 (2001). エビデンス臨床心理学 日本評論社
- 丹野 義彦 (2002). 妄想と自我障害 下山 晴彦・丹野 義彦 (編) 講座 臨床心理学 4 異常心理学 II (pp. 189-206) 東京大学出版会
- 丹野 義彦 (2015). 臨床心理学とは何か 丹野 義彦・石垣 琢磨・毛利 伊吹・佐々木 淳・杉山 明子 臨床心理学 (pp. 3-23) 有斐閣

Tsakiris, M., & Haggard, P. (2005). The rubber hand illusion revisited: Visuotactile integration and self-attribution. *Journal of Experimental Psychology: Human Perceptions and Performance*, *31(1)*, 80-91.

7. 付録: 研究 1 の引用文献調査の詳細

付表 1: 量的研究の分類

著者	引用文献の種類							合計	掲載巻
	量的	質的	混合	総説・理論	書籍	その他	不明		
伊藤	3	3	1	0	10	7	2	26	34-1
吉村	8	1	0	0	7	0	1	17	34-2
西村	8	0	0	3	5	1	3	20	34-2
新井・庄司	2	4	2	0	4	0	2	14	34-3
中谷	16	0	0	6	5	2	3	32	34-3
田中	16	0	0	2	2	2	2	24	34-3
樋渡ら	4	0	0	4	8	1	0	17	34-3
原田	16	0	0	6	8	2	0	32	34-4
倉成・石丸	1	0	0	2	3	3	1	10	34-4
吉住	7	1	0	0	7	5	6	26	34-4
計	81	9	3	23	59	23	20	218	

付表 2: 質的研究の分類

著者	引用文献の種類							合計	掲載巻
	量的	質的	混合	総説・理論	書籍	その他	不明		
砂川	4	6	0	1	5	3	1	20	34-1
近藤・長屋	0	5	0	2	8	2	0	17	34-1
山内	0	4	0	5	14	2	4	29	34-1
佐々木・田中	1	2	0	2	16	7	0	28	34-1
上田	0	0	0	0	12	0	0	12	34-1
高島	2	5	2	0	11	1	4	25	34-2
隈本	1	2	0	2	5	4	3	17	34-2
土屋	0	2	0	3	15	3	2	25	34-2
淵野	0	2	0	0	13	1	0	16	34-2
石橋	1	2	0	1	14	0	0	18	34-2
横田	3	2	1	4	5	0	1	16	34-3
杉嶋	0	3	0	0	11	2	0	16	34-3
浅原ら	0	1	0	1	15	7	2	26	34-4
麻生	1	0	0	1	9	2	0	13	34-4
金子	2	0	0	1	13	2	1	19	34-4
小山	0	2	0	0	13	0	1	16	34-5
山本	0	0	1	5	9	0	0	15	34-5
野原ら	0	0	0	1	8	5	0	14	34-5
大塚	3	1	0	2	13	4	1	24	34-5
計	18	39	4	31	209	45	20	366	

8. インタープリター養成プログラムを受講して

「科学技術インタープリターとは何か？」という問いに対して、「一般社会と科学技術の間をつなぐ人材」と一言で回答を与えることはできる。現に、講座のホームページにはそのように書いてある。しかし、「一般社会」と「科学技術」という便利な四字熟語の背後には、無数の概念が潜んでいる。一見すると1つしかないような境界も、蓋を開けてみれば無限にあり得る。プログラムの講義を受け、議論を重ねていくごとに、知っておかなければならぬような領域の見通しばかりが果てしなく広がっていく。それと比べて、自分の知見の実質はといえば、歩みののろいナメクジもびっくりするほどのじれったさでしか成長してくれない。実に実にもどかしいプログラムだ。

すべての境界を把握することは人間には不可能なので、万能のインタープリターはありえない。具体的にどの境界に橋を架けるのかは、インタープリターに成らんと望む個々人が自ら定める必要のあることだ。「科学技術インタープリターとは何か？」という問いは、「あなたは何と何に橋を架けるインタープリターなのか？」と読み替えることができる。多様な背景の同期と議論し、インタープリターとして最善線を駆けている先生方の考えに触れることで、自分はどのようなインタープリターになりたいのか、なれるのかを考える機会と考えるための材料が与えられた。この機会と材料は、私がこのプログラムを受講して得られた最も大きな収穫だと思う。

修了研究で扱った質的・理論的研究と量的研究は、私がこれからも橋をかけていきたいテーマだ。プログラムを受講した当初は、いわゆる文系と理系の境界に関心を向けていた。心理学という微妙な立ち位置の分野を専攻しているとどうしても気になるところだ。修了研究をスタートするときにも、これをテーマにしよう決めていた。しかし、いざ腰を据えて考え始めると、文系と理系というのは予想以上に曖昧かつ複雑な概念であった。何を基準に区別されているのか、文献によって言っていることが違う、分かれていることで何が問題なのか...そうしたことを石原先生と毎月の面談で話しながら、文献を読みながら、考え続けた。結局、大まかな方向性を決めるのに、全工程のかなりの部分を費やすことになった。質的・理論的研究と量的研究と、少し形を変えて扱うことになったが、もともとの関心から逸れてはいない。突破口が見えず悶々とした期間が長かったが、今振り返ってみると、曖昧な興味を副専攻という形で、腰を据えて考えを突き詰めることができたのは貴重な経験だと思う。また、悶々としながらも取り組み続けることができたのは、やはりこの分野に私が興味をもち、橋を架ける意義を感じているからだろう。

今後も文系と理系の境界と、その間の橋の架け方については考え続け、問い続けていきたい。きっと、考えたくなくても私は考えずにはいられないだろう。ここまで書いてきたように、プログラムの中では考えることに重点を置いて取り組んできた。しかし、一筋縄ではいかない境界を前にして、考え続けるだけでは何もできない。考えながら、実践するインタープリターを目指していきたい。

最後に、私がこの講座で触れたなかで、最も印象に残っている言葉を共有して終えたい。「世界を完璧に表象することはできないのだから、研究も人間の認識も終わることのないものですよね。ありえない理想像と比較してネガティブな批判をするよりも、どうすればどれだけ前に進めるかを議論するほうが生産的じゃないですか。」

